夢想兵衛胡蝶物語前編

叅

へ13
3845
3

門へ13
號3845
卷3

夢想兵衛胡蝶物語 巻之三

東都 曲亭馬琴戯編

慾國

下中弘品

さて元来るのなりのるのあ何とそ迷ふ。るすとりくどもあるが如し。こをを
梢の陽氣よ蒸まく。春花さく小鶯よべし。花ハ色草木の蝶ろく。色も香
情慾の蝶ろく。花ちて實を結び情合して子を生ど。草木非情ろれば。
花よ相惑かど。人ちまを人く欲ぶりのハ。嗜慾の害ろり。ちれりて。色ち
元来るすとい。桃ハ三年ありて花され。人ち十六ありて色情ちどるて動とつぶる。
草木秋よあへバ凋落。男女老と告く。いろけるくなりざるのちるるのあ
ちるよ。色ハ元来ほとしへども。彼よ化さるとれハあるぶど。夫物の蝶ハ人ちれを
憎むに。草木の蝶ハ憎ャど。ちれを愛して暮るを惜。愛谷ハ詩歌を吟ト。

酒翁ハ舞踊る。況て情慾の媒ゝ至く。そを紙好ざるものなく。或ハ或ひ或ハ
潮ゝ身を忘れ。それ人ハ酒ゝ造ゝ飲ゝの醉ゝ。とゝ人ゝ米の饐ゝ紙ゝ設ゝ
ゝ人ハ情慾の。媒ゝ。ゝ紙ゝも曝ゝ。義人ハ血を色ゝ皮嚢ゝ。可
愛も寐言ゝ。句袋や空炷ハ名人の。ゝ薫ゝ。その日ゝの
つけりのれど。それ人ゝ。ゝ人ゝ。兼好法師ゝ。それ
ゝ夢想兵衛ハ生韓非子ゝ損ひ生雁皮紙の横紙ゝ破ゝ。浦
嶋翁ゝ膏ゝ。慎入ゝ。ゝ。ゝ。

の弦あり。帯屋の四十男おそんよ倒れ。梅枝が三百両ぜに間よ隔る。出村の玉屋玉よ瑕あり。東金の下銀。金よ縁あり。化野の尾花へ月の刀屋を招く。愛護の若松へ手弱女よ引る。浄瑠理坂の十二段目よ牛若皆鶴姫の代休示あれ。堀河下る町の中程よ。お志ゑん傳兵衛が賣居あり。彩衣の明烏。めつゝ子を告るれば。山寺の撞撞坊さま。後朝よ気障めつゝ。男ゑ慶まゝ。兄弟ぶんとけるゝ。媒妁用ひらるゝ。駅伝ん夢ー。恋の湊の繁昌へ一トそれ廿四丈の屋葺店。ろつくふして押の蔭よ立るゝ。我武者の買食頬より先へ鼻を落ー。百銅ろつ紀三の大饅氏月の朧よ夜を明るゝ。いろ物喫の向ゑ。ぼちやくのおちよと同へ。比翼鳥の吸物へ。煮賣酒屋よあり。佐用嬢の化石へ。珍物茶屋よあり。玉蜀の大あむ。夏掘のあるゝ顔。ぴゞとも色ぶん山ぶんへ。前と押へてきろろくる。女湯よ入へて。乳呑子を位。男湯よく透て。生豊後よく咽候が湯へ。西瓜の売賣。直がゝり。蛾くしろのさろま芋へ夜食の塊り程胸よつゝ。拵業師の一本綱。渡りとつける非び人。ゆるひ隙の名。家書判へ切ぶゝの墨色。考へ。浮気の指切髪切へ。堂誓文よろて件のぶ。さんバ二の腕へ。灸へ剛毛よあるゝ。三の糸で拵る擬袋へ。掛さぶ紙用てある。明ゑの固藏へ。冷水賣の砂糖。ろうたゝる。娘乃おそん婆へ蟻のとゝる。氏の皮。ろう妻く。立清のとる夫婦。喧嘩へ夕立乃花火。ろりろく。婆こが居る。揚弓へ。引汐の醤網。ろまつぶ。蒲洋屋の女房。敷虐でゆろく。團子焼切ろろん。團子鼻稀ゐんべ。會日の植木へ。見合の道具建。ろつへゑ朝来りの閑帳へ中宿。ゝ生あり。ゝ乳母の

日金。片手で持ぶめて。並床で踏らゝと嬉しゞり。坊えんの金剛。両足よ
ひらんて。子守が内證の相談よ邪魔るゝ。井戸端よ聚ゝと紀。雨夜乃
品定めゝと疑是。摠雪隠よ志のびと紀。未搗む鼻の臭紀と忘と賢茱
の張札ハ。小便を志なゝ讀む。在郷の幼訓深ハ。都の茶飲友ごちよ
志ゝど。お妾の啓安。さ手ゝこ顔でゝゝ。誓古所の格子さ紀。そりあげて
人とゝゝ。お娘さんの裏店さ見て。鼻緒をゝそさせると紀。隻足あげゝ。
鰌を踏んとする警のごゝ。道落坊が便毒。潰て膏茱を志ゝ付ると紀。
片膝立て。羅漢よ似ゝ。ゝゝる按摩気水を減ら。踏みゝる導引
放屁と厭ハゝど。陝いゝで廣いものゝ。水茶屋の前垂ハ。短いゝで長の
ものハ。半元服の袖ゝ。羽織。浜町ゝる駒下駄ハ。ゝるとゝ紀よ。次板を
鳴ゝ。縄を被ゝる下堪与ハ。受ゝる紀よ。嗅か手利を誓ゝ居る。昔ハ

志ゝ志。今ハ志ゝ志ゝ。ゝゝん志ゝ。ゝゝん志ゝ。ゝゝ子ハ。ゝゝゝ大
博連と異名せ紀。残ゝ檀那とゝゝ。残ゝ紀を出ゝゝ。ゝゝ
志ゝ情人ハ。切ゝる三甚速ゝ。足元ゝる働妻ハ。博ゝゝゝ起ゝ。
ゝゝゝ手東の水髪ハ。留残をゝゝるよゝ。ゝゝゝの横梯ゝ
天窗の片荷ゝよゝ。腋の下で結びさげる幅廣帯ハ。前よゝ
ゝと志紀ハ。忽然ゝゝ後ゝよゝ。女房の腰よ鍵と見紀。細代の花結ゝ
交殻を挿ゝ。借残を恒是ゝ。嗅を怖ゝ。男児の生ゝを飲ゝ
ゝて。娘よ嫁せ。ゝゝ定紋を野夫ゝゝゝ。色子の幇紋を嬉しゞり。
先祖の法名ハ覚えねゝ。花女の名ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ色
慾國中品下品の風俗ゝ紀ハ。苟ゝる色気ゝ紀よ。ゝ男よ捨ゝ。
夢想兵衛も今ハ紙鳶ゝ放ゝゝ。毎日旅笠ゝゝて人物よ出て

夢想兵衛巻之三

たくりも居らまどつらく以るよ。この地の人気。弄くゝ鳧の先智恵は
て。進む紙ちまども退くとまらば。敷金の女房ハ。資ゝもて。亭
主と凡よ布礼。かゝるそ揚る仲人ハ。いまゞ揚まゝどゝて。つゝが落情を棚へ
あげ。男よ餘んの身栄あまべ。女よ餘んの己惚あり。旦よ去ゝまて。久よ
かくり。去年の朋輩。この春ハ夫婦とる。世帯ハ女房ゝ先へもち。
備残ハ子どもかゝ不沙汰よるゝ。尻も結ね縁定めハ。死神の社既よ
立在。首のまわらぬ物前ハ。隨得寺の山よ繋ゝ。年中いざとざありと
いくども。是非の判断。そるのゝく。道ゝふね哀と憐ゝ。義理よ缺る
色男子を可愛ゝ。偽を飲んで。晩日の月をゝぶね。誠もくるけまど。
物いふ花と色。仏法いまゞ弘まゞ。そつゝるゝ沢いひ。儒道いまゞ行まゞ
て。裏道絶よ冥利を汲ゞ。夫釋ゝの。雪山よ薪を樵ゝ。衆生を濕度せん

乃ち。孔子の陳蔡よ。糧を絶しも。道を弘んが為ゝ。これ〻ゝ〻この國へ来て。衆
の病を救ひどの。日本の廣言もそのひる。浦嶋仙人の教洲ハとるゝ。と。ゝ紙と
ちて。一紙の告文を書写え。これを竹のうゝ人ちゝ。天拝山の菅丞相。さぬの浦なる
崇徳院ゝ。ゝ家の棟ハの。ゝ高くさあげ風。ゝ拾されば。一丈紙ゝ。の
切ゝ。ゝ。ゝ。

公遠ゞ貴妃陽ハ二番煎じぞいとく切る。こゝ紙りそ石雄ハ風とゝ之ゝ主と
藥ちゞひ。松浦ハ石菜の徐毒のゝ殘る。男女意暮の骨がゝくハ。竟ゝ皮
肉の腐縁とゝり。親類の薫茱ひゝ。ゝゝもその驗ゝ有ゝ父母の吸
ふゝべ。血で血をあゝくゞも愈ゞ。これゝゝハ年が茅ゝゝれゞ。病ひ劇ゝ死時
ハ年をゝとゞ。親分鉛を投て。當分の居所ゝまゞつゝ百年の命をとゝ
りのふゝ七十日寺のゝとゝる。豈悲ゝゝゞや。豈痛ゝゝゞや。予が家
幸ゝ家方の良茱ゝり。これゝゝの難病を救ハべ。俱藥ハ調進ゝ及べゞ。
見脉を診て。病原を論ぜゝとゝ。ハ。眼中春を生ぜゝ。忽地惑ひの雲霧
て。了簡臍の下ゝ。ちつゝ魂入りゝゝて。ゝゝゝの人とゝり。その効恰神
の如し。病氣平愈の後とゝ人とゝ。毎朝仁義五常湯ゝ堪忍五両を加へ。
絶ゞ服用ゝ。餘毒を補ひゝ。ゝべ。親子下がりのゝ合ゝ。

とゞ記しけゝ。いゞくの浦でゝ。懲をゝとゝぬゝめゝゝ。施ゝ療治とゝあゝゝべ。利
ぬゝゝ。損のゝぬゝめゝり。背ゝゝ吾とゝ。悪とゝ。ゝけのつゝゝ意病を緩
ゝり。ゝの人のゝゝゝゝゝ。迷ひの雲がゝゝゝゝゝ。こゝやゝんゞゝゝ
ゝゝゝゝゝ。了簡のゝゝゝ。朝ゝゝ養老兵衛が出張へ結ゝゝゝゝ。ゝゝゝ
けゝゝゝゝゝ

見黒繻子の帽廣帯を。前でちらと結びおめど憶せどちらり出るへぐと
ゆらが素人めりまと愛敬兵衛が高坐の河とりよ勝行ようて。ちとやるよ會釋
しのちとへもえまこの國のものよあくぐ。大日本山城國山崎の百姓何がげ娘
あくく夫の爲よ身を賣し。首尾の憂堪難。勤の中よ紀夫ハ非業ふ死しとく
帯もちえ身まくよるりてハ後の世と。弔ふよりと外よとびるく。西國順礼を
ろひとちろるくぬ旅路よ紀の浦あく。北條人の家合私吹流されてを慈
と名ちろる國へ見ちれど今いろけもるれ夫へ。ちる操の寡婦ぐし昔を
る杵屋が三絃。それを教てやるよ春の命を継棹よ。まぐ住るれぬ枷
世帯。見るとと沢ちる身ひとろみも。見ぬ孤ひハ方々の空るつり紀伶俐人
因果とろくど前の世のるまちとねば悲ひハちるとど。神も仏もうらめと。
いとで歎ハちを境。雲霞がちるる。晴よして何ちるるまくく。意病

るくねどえハ意。ちとへが身のちくくちるるくと。委細の
沢ハるちみと紫服紗よ色じる。一冊の本ちり出せば。夢想兵衛受と
て。十二假名手本忠臣蔵。と外題を読でちる点ぢ。ちへハ塩谷の浪
人早野堪平とちくあよちりるどでぐる狡と同とてちけさ。俗る。
恥しるぐるその師が。るまる果でぐるまと。ミテ十ちるのおかる女郎が。今ハ
学者を親じるぐる。意の病の療治ちけあハ。何とちくちとと。と同へぐ
間ちく小勝をちるめ。さればるのでぐるまと。病ハ原を補ねば。全快ハ
せぬとやる。ちとへが病根ぢぐるくば。椎量ちくもてさるませるつとも夫
ハちる気の慢ちる。殿のちん大るよ居あハせど。最期の供よ後ちくぐ。人沢も
るれ越度るれど。忠義の志ハ人みも猶ち浪くこの身のちるれるく貧ハ
ちしよ弔ちくと。石碑建立の金ちのくて。歌紂の連判よかりえが家の

須ひ。夫ニ面のまろ。ふちう。男の仇人。定九郎を。ちくねべ部て化と
ろう。ちぐうの返答ゆえつまり。ずご三十よろろ子るくびよ。腹をくくさくえぬ
ふうるされし。神仏もうらめく。ちく釈与一兵衛うん。百姓でそそあん。頼
りい人。ろくこ一人の女児を賣て。腎よ忠義をそそさもうんと。年長の
夜行を厭ハぞ。金そのくく帰る道あく。定九郎が双よめう。ろぐ子とそ
ゆ夫の為よ。操を捨く。花街の勤め。年季の明るをまつうひるく。親
夫の精進日ゆ。ぐうどよくうさせるふとん。天道さまも情がほ。ちくれば
忠義ハ身の仇みく。貞女烈女ハ神仏よ。憎るものみやあくん。りいよく
ちろるうべ。その色欲の罪よ生ちく。浮気よくうぐ一生の。得とヤス
りのふあうどや。その惑ひのちるゆよ。お療治るされて下さうまう分。と
まづちめうりもづうい。容躰つけう幸気病。妄想兵衛ハ性くく

性のろうん息子るのどが。うくくと尽ーるぐくゆ。六段目のぐんまつま
よろのうちのさそがよりが身の悪いてそ。ちひあくる友よ。療治ゆちくれ
どさう愚凝よ凝りまつてん。擦ろぐうそ手間がハる。色ゆ彼据皮
の脱ち。息子や娘が。已惚境ちくと違ハて。生忠臣と生貞女の已惚ハ。
勲よ小才学ちがあるゆえよ。人のちくぬ難病じゃが。良薬がある。ろくくて
進ぜう。そりぐが給事ちめされよ。塩谷の奥方ゆわよ門前が。師直
を恥くめのひーと。そりぐが身を責て。夫の為じゃとちひめされど
ちまうどもるぐ病症で。ろる色女賢くて。牛賣をとるハとハうの
ちゆ。るぜといぐ。師直が横恋慕。ろうゆ毒を食ぐ。四ちで越るとハ。人外る
不養生。ろう論どるちぞもるん。ゆ分別うれど。出ぬ月一の奸佞邪智ハ。雑

きてぬるのもの。殊さら直義朝臣を饗應司の師範なれば。敬して遠離るふまくはなし。さる程女の鼻の先みて。日もあるべきよ。饗應の當日。場所をも憚かべ。女を使ひ立て。夫の手わけ小夜衣の經冊を贈りて。恥はらしをせしてこそ。已後をこそあらんとは。悉皆気のちがつて穿鑿のあるまじきや。まのあたりぞ。當坐は師直が艶書を投げくれたる。禁内をとろかん仇どもや十戒の古歌なりとも。夫は告げて。師直は贈るに不義なり。礼は男女はづらう授受ぞとは。紙を重ぬ方の悔なり。又判官どのも判官どの。奥方は右馬頭の妻があげくなるとて。何のちがひもなしとぞめど。なほ箱をその方へ遍は執夏へ遍は。なほこのうさこれは一向論外なり。もしれば塩谷どの紙数せ一丈八小夜衣の經冊なりとぞや。あまりに気の毒の事主なれば。腹の立さのみる紙もなしぞ。

女の才はとりうるうんぬ正直なるはうつくしかりけんさて夫の腹をとりもとりつて。真直はいつてのけ。気を立て人と闘諍をも禍を惹出さるべし。貞女といはるべし。父い子の為は隠し子は父の為は隠しとも正直はその中はあり。申さばなほ前。真の貞女といひがたし。況てそのの大膳亮教さいはは主命なれば。孫兵衛所の表門へ夜のうちは推参し。供はつまさは下部は鼻薬を餌をし。早野氏と密會ひ。あまりに拙びは多がりて主の囚徒とはなれば。喧嘩はこの捧ちがり水。伴内と挑みあひて。主君の罪をきし。夜あけぬうちはとくに矢落。なほ不忠不義の人はちがはど。悔て改めは悼ることのけはば。大星氏のなるべくの。大年紙推量し。夜討の人数は加へはと希はんとやそうるうていはぬ者。その本形のまさは主へつて者。

ちゝをとゝして男の仇人定九郎を撃ころうれど猪ばかりとうへて
を撥拂ひとゞめとりして某はるんうと死人の懐へ手をさし入れ財布を
調べ荒介とし俄頃よ彼のうろつうへ賊をさく定九郎よ者らば。
腹ハされる。なぜとうひめく畢竟二ツ玉を撃こあうへ男の仇人ゆて金
ハ女房賣しる金なれバこそうけまこてハ一向そのうへハまれど金く鉄炮
の玉が前翁て旅人を殺せとゆひるのぶ。完初の周章ようつて変て
竊よ欲び不義の財をうく。慎の功名よせんとゆひ。そのゆたち汚れ
うう。聖人ハ渴ちても。盜泉を飲ず賢者ハ仇田よ履を入れず。鶯ハ死
ても種いつまゝと世ようへ是ー早野氏も人の枉死を幸ひよ志を移し
とゝハ前の強盜も虚文ろう。強盜を取くるる紙鉄て切ゞ強盜ハ武士の
るのとひまやるゞとあるを義理よくんうるうちぶ。げよりとゆふも稀ある

ありて。公儀とて口実を哀くも傷痛けまゞの理を説ナス。夫貪ハ士の
常ろう。武士ハ食ゞと高養歯。といふ族ハあんど。切ゞり強盜とも大ろ
るんとハ何の代よ。ろうれし甚ー孔悔ろう。廉士ハ遺金をかくうんゞ。
まうれバ早野氏の大死ハ汝よ生く汝よ返る。天理ろんバ。神仏ハナよ乃ゞ。
竹田出雲をも恨るとろう。是慾ハ牙を倒しその病ひ不義の財ハ命を縮
る毒茶ろうよ。曉うのくり。これ日本曾我物語を読ゞ。疑ひゆふ上
あり。曾我兄弟ハ純孝の勇士ろう。祐成時致幼稚とゝろう。又の仇人
祐経を討ハとゆふ志穏ゞ。十八年ゞ間百折千磨の難苦ゆハ仇ゞ。
祐成ハ大磯の廓ゞ。狂女虎と相欲び時致ゞ。化粧坂ろう。女房と
契り浅ゝとゝ。仇を拉撃んとゆふ。假初ゆ。慾よ志を
移ゞとゝ。真の孝子よあゝ。つゝく曾我兄弟の人とろうを考るよ。

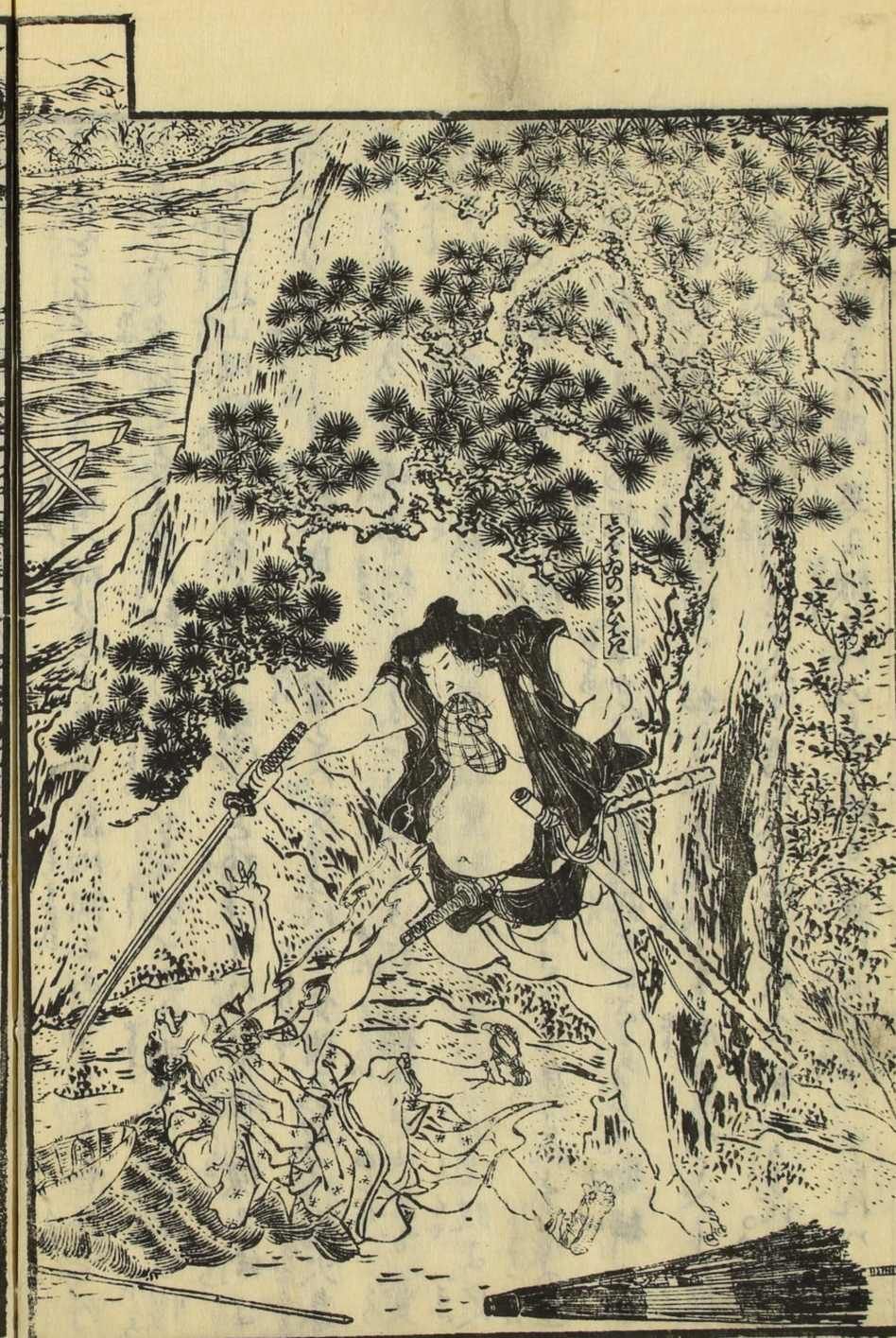
色を好む人よあらじ。然べ大星氏の祇園町なる茶屋にて。仇人
よ知放さじん計畧なるべけれど。帰へるなくの花女なるねば。人を殺の
才あるて君が一夜の情ふハ。妻が百年の命も惜めらじとて。祐成が為
よ尾とるのりさそ。吾光寺人赴死るるべし。とれらの義理をよくも考
ど。世よ君又の仇を寃ふりの。動もされば色慾よ志を移さじといハ説
あり。やや本意を遂るとも。ひくてハ玉よ眼あるべしと。恨もべし。さそ
亦そりの比叡又与一兵衛どのハ。百姓ふハ見あげて人物。ろくひとり
の娘を賣ても。賢よ忠義を立させんと。彼叡又どのハ。ろくとも母
にもよ〻泣せんよ去るべし。女ふハ三従の道あり。家よあるてハ父よ
従ひ人よ適てハ夫よ従ひ夫死てハ子よ従ふ。是所謂三従なり。そもそ
い既よ。堪平とふ夫あり。その別深ハ父母よ告ど。関隙を攢牆を踰る

摶べ合るのりとも。又母ど是叡許して妻にれがらしく夫よ従へべし。ものるよ
牙賣のり叡。夫よ終合てハ。納得ずるまんとそ。のり叡深く匿し。親子と
人内談ず極めハ。真実ふ似る不実なり。畢竟一文字屋才兵衛よ伴
る出合りらおりよく夫が立くつれべとそうけど告ど。て走るとれハ。河を渡
ずくよるの罪脱ど。とれらふ義理よ感ひおく。匿しそうれとおりあれを
あり。人よ醋と是て。とれ。家よるれをあるが。隣で貰ふて。その人よ遣る
るのふて正直實儀といふのふハ。凡忠孝信義の為よ。子を賣。妻を賣
りのハ。曾女が欲よ逐ずとれ。子と捨て妨の子を伴ひ。易牙がその子を義美よ
ものそ。掘公よ。めと同日の苦節ふて。背を名聞を好ものの惑ひ。子と
妨の子とのづるる親一れ至親を捨るハ人情よあらじ。況て子を殺して媚を
主君よ求るのハ。虎狼よりもなを。彼その子を愛せど。爭う賊よ君をあるのん。

されば賢の為よ子を賣らるれば。婢よ義ありといふとも。子の為ゝ不慈の呪
るゝ。君の為よ妻を賣るれば。君よ忠ありといふとも。妻の為ゝ不仁の夫なり。
門を解て薪とし。井を塞で臼とす。一旦その用よ至るといふとも。あらじ。
ふべし。夫忠臣ハ孝子の門よ出ず。烈女ハ清廉の家よ適ず。勇将の下ゝハ弱
卒なし。仁義の郷ゝハ盗賊なし。子よ慈愛なるれば。真の義士よあらず。夫
婦の礼なるれば。真の忠臣よあらず。この世ふて積悪のものも。老て悔ゆ
その悪紙賢なるれハ。金銭をもて閻魔の廳の。帳面を消せんとす。或ハ
布施し。或ハ堂塔を建立し。手の内を入て。仏よ媚て。未来の罪紙買んとす。
ものも往々あり。されハ愚癡の至り。早野氏が百両の金ゞよ調進せば。以前
偽奇の罪と贖ふよ。足りるべんと云ハ邑も。大くさてらの了簡なるべし。世ふて義
理をもちゆめされとゝよ。与一兵衛どのハ。祇園町ふく。五十金の身價を受

ゝ。夜をこめて。ひとり山峠へゆき。一思よ。怨地獄よあらんや。金を所
持せずとも。危ゝを去るものハ。ひとり夜行せず。況て五十両ゝの大金を懐
みて。野道山坂の婦ひるく。ひとり行くゝ。石を抱て。深き淵よ
臨むよりも危し。定九郎よ出會ぬ。かるゝ手負猪よ。ひし。殺火急
の金なりとも。なるゝを疑ゝを行ぶりる。これ。ぶくゝ拒ゝ禍ふして。女児を賣
る不仁の金。忍地獄を殺ぐ。又とるゝね。豈ゝれざらんや。その身既よ定
九郎が。又よ縋ゝ。るゝ。脱ゝ。るゝ。やとゝく。ゝんざゝ足透されゝる。懐の金
を押隠し。これハ昼食の握り飯。娘がゝ。ゝ返魂丹でゝざるゝ。勧解ゝる
ゝるゝさ。ゝくゝハ小児ゝも欺きゝ。ゝ。ゝ。彼
既よ金よ心あり。争賠結をゝくべき。馬の怒ゝるゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
犬ハ吠びゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

あやう



手を傷る。憑あるものへられと近つくど。昔漢朝の陳平が楚より逃て。漢
へ仕んとせしと紀。楚の兵追きんとす。殊さらに道を急ぎ。夜野渡り
さまかりて。船を借り向へ渡さんとせしに。二人の渡守ハ強盗みて。この夜網を
張て。ふる舟をもがるとて。ハ陳平が舟を借んといふを。竊に飲びて。
よく祭せて。中流へ漕出し。矢庭に殺さんとする気色を。陳平ハ推して。
二人の渡守ハ刺ひ。ハれも幼きより。水濱にあり。舟を漕て。紙ゝ
おのゝ裸にて休ませ。おのれ乗て漕べし。といひもあへず。衣服を脱で赤裸に
なり。ぢて舟を漕しべ。盗賊なるハこの形容を見て。さてハこの懐に金ハ
なるべ。ものもふる奴を殺して何にせん。と云。忽地に手足絶絶に向へ
岸へ送りし。程に陳平ハ九死を出て。一生を保ち。衣服を舟に捨おきて。岸へ
跳り上りさまの辛苦ハ。ふれど。遂に漢の高祖に仕て官位左丞相にまで

へ。紙のぶりぬ。赤宗祇法師が行脚せしに。ある山路を越るに。盗賊あり。宗祇
が髭のふるがれを見て。貧ぢやと思ひて。林の中へ
走り出。右の手に刀を引提。左の手に宗祇を捉て。既に髭を剪ん。と云
ふに。宗祇ハ騒ぎもせず。「ふるゝ。「当帝の髭ハ。ふるゝ世を捨ふるまで。と。孫ふれば。盗賊大に甘心し。故て林の中へ
入しといひ伝へ。彼陳平が赤裸にふるて。物ふるを示し。賊の軍に紙絶
なる。隔機変変の妙計なり。又宗祇が狂歌を詠じて賊難を脱ハ。危
なる盗賊。歌を聞ハ。決して放ふ。ぶ門関非心非仏の頌ふも。
詩人に遇ぶハ。獻ぶるとふれとあり。詩を持ぬ人に。詩を贈ハ大ふるもぶ。
宗祇ふるハ。寓言なり。ふれバ陳平が才をもて。賊にあて。衣服を
失へり。況てその餘の凡人ハ。物と命と。両ふぶ全ふる。紙ふんや。山中に賊

と出あひて。ひとぐ勇。彼よ勝べくい。それと戦ふべ。ひとぐ勇。彼よ劣ぐ〜ハ速よ
物を与へて命を保よ。ちぐ〜物よ愛惜ると死ハ物を失ハのみ。
ど命も又うしなる。大よ憤死りのハ。辟小よ恥ぐ〜を恨とぞ。ちれが与一
兵衛どの〜枉死ぬ。自業自得るりるぐ〜ど天道さまがゆんぬ
ぐ〜ぬ。神仏ぞを恨べ。その場を去ぐ〜ど。仇人
定め郎を撃ぞ。ひ〜ハ天道さまよ如何ハる〜。五分でも遺ぬ。
さそ。ぞめ。ひさ通り。そりぐ夫よ告ぐ〜。身を賣らんとそひつめ〜い。
ぬ。ちぐ〜ふもせよ夫の為とあるべ。ゆさる〜ぬもあんが。當時早野氏ハ
入聟る。年老ひ〜両親へ孝類のるハぞど。只管よ身を賣ぐ〜と。
希ひ〜ハ。不孝のぐ〜の不孝こ。そんべ。兄貴平右エ門が。祇園町ふそ。
よめぐり会釈と夫の横死ぞ告ぐ〜ぬ。ぞめ与一兵衛どの〜る。

うち驚ぐ〜ぬ。堪平ハ腹切ぐ〜死ぞハ。ぞ〜ぞいぐ〜俄頃よりぐ〜めそ。
ぐ〜死んとぞ。釈と夫とその恩愛ぐ〜ぬ。腹ハ〜れる。その日愁
傷のぐ〜いどふも。釈夫の精進さそ。ぐ〜ぬぐ〜ぞ。不孝の罪とハ。ぞめ。
ものとこれとハ殊勝よ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞの口の乾るぞ。ひぬよ。物体なんが
そ〜ぞんハ。非業な死でもお年のぐ〜。堪平どのハ三十よ。ぞ〜ぞ〜ぞ〜死
ぬ〜とハ。さそ。朽ぞ〜ぐ〜ぞ〜ぞんぞ〜とハ。不孝千万るる口上ぐ〜ぞ。ぞ〜
まで間ちぐ〜ぞ。簡ぬよ。祇園町でハ一夜のうちふ二度月が出ぬ。ぞ〜
ぞ〜ふ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。カ弥が対ぐ〜ぞ。死入る月の山科ぐ〜ハ一里半とあれば。
月が入り果ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。その後九太夫が。縁の下ぐ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ死月新よ
遺ぐ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。
ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。

かくも。むくつけき不孝なる貞女といふべきなり。親と夫の恩愛を天秤にかけあへんとせば。その天秤が折まるとも。孝道重いるべしとやさ。親を年ごろまもらんが非業なる死をなすとても。忍ばがるべし。夫はまだ年ごろやさ。後切て死なばその悲しさも一倍まさるとぞいふべきなりのぶせき時でも。人あはせられぬ口上なるべし。全体夫の為なるべきとも既に夥の客に身を汚して。年季が明ちなば又四の夫とひとつになるべきふとおもひ。忍ぶ心を生じて。箇ちがひなる女の心操を正くなる。道理をまもらぬ悖なるべし。おなじくなるべし。金翠金傳といふ小説に翠翹といふ箱入娘が金氏の息子と。夫婦のやくそくしたれども。いまだ婚姻はそのうちに。そのうちに。取又が身に係し。不慮なるこゝに起して囚徒となりしなば。親を救ん為に己を死ぬべき翠翹が身を賣て。その罪を贖ひ。既に夥の人に身を汚されしなば結髪の夫に恥て後あへ尼となり。妹をもて彼金郎に妻せるは道理至極の始末なり。こゝに一旦賊首の妻となりぬれば。つゝしみ慎のよ。寃を報ひんなどは女子の才覚にあるべきなり。こゝにおいて論ずるに。絶早師氏が恙なくて世にあるとも。恥をまもらべし。年季あけて後に尼となるとんあん。貞を破て貞を全しといふべし。年季あけしなば又舊のごとく。夫婦になるとんとぞいふべし。慾の腐がぬけぬ者の惑ひなるべし。二人川の上にて一人溺るゝとき救ふべし。二人ありとも溺るゝとき救ひなば。一人岸にあり。こゝ絶りて救ふに便あり。二人とともに溺るゝとき。二人水中にあり。こゝ絶りて救ひがたし。こゝに夫婦は親又まさる。名利に溺るゝ。夫は妻を救ふに便なく。妻は夫を救ふに便なく。親は子を救ふに便なし。こゝをもて鶏の鬣など齟齬。その根本は。そもそもがいとづくより起つ。されば罪障いまだ消滅せざる。その色慾闇く漂ふ

さるに。自然の恩報ずるをもとるを情とぞ。天道は義士や貞女を憎まぬ
ものとぞ。恨みをなすは物侍なり。その道理を弘まくて。孝子は己慾を慎む
べし。ものの子の孝を尽すべし。成人夫婦。それ母を保養はず。一ぢ遠の
雲。それるのみ有々ぬ。持茶まん。唐の鄭氏が女孝傷まえの
許熙載が女教四巻をあらく。服用もべし。と説諭せば。ものは顔を
報ふ。退紅ぬ二番八十六七の人ぐのん娘年は仙あんぬ茶釜髪も。
結髪の夫は後まで。それは母釈とんえ
て。四十ばかり。和風俗い中かく。もちぐのの寡婦とん髪の結ひ
ものふをまとえ。件の二人。ものるが好く居るり。娘は恥ずい中。しく
容貌といひ。ねるを。母釈が隠ものに。それるるとぐへが娘釈の為夫の為
霊佛灵地を拝ます。拝ます。ものとくにひ。熟ぬ旅鹿二日数行く

大和国ものるどのと名告あひ道つまとるりて。ものぐと。
紀の国の浦の祭合和暴風よあへて吹るがされ。それいくさまぐの憂苦
労は推量るされませ。ものうせば牙拐よのるれど。ものへが夫李彦
は。桃井家の忠臣。娘が夫は大星力弥。唐山の晋の豫讓。ものるが朝の由
良之助。日本と唐よりと一人の釈とりち。力弥が妻よるつまは。
女御后妃よ備のより。女よ稀なる娘が手柄。他なるへ。春のるくて去れ
ても夫の家。ものに死まば本懐と。命をまぬ貞。今時の娘あ
ものるまいと。世の人もナスばなるへとものるるね。ものるるとそ
と。ものへまとへと。ものもよものあるまぬ絶体絶命。娘が婚姻そのへば。
日が月もとりふと。ものへ殺極めよ。ものひるみぞ本義が。命を捨てものくと
その日の昼へ叶ふれど。ものぬ赤るぐへものせもぞめよを別まの新枕

それも不幸のるのれど。二十よ是ぬ娘小浪よ。後家そそそ親夫の。
菩提を吊ん。吊せんとく。旅をそうひも勲よ。持ちうれ世よ存命て色慾
國へ伶俐とい目育よ境の門ちぐひこれをそくば貞女ろど。形ろんりのいを。
この國の娘子どもがまぐ年もゆうぬうちいとづくのたのれくとうくで有得
る家うく漂致を呑まれやまくよ支度金をそうく。その身の栄花そ
いよ及ばぢ。後みの釈まぢ引そうて。左團でくさるも。世みの往くある
るひぢ。天道誠を照らくしもうぢ。依估見員ハるされぬ答。とありくハ
そうく気も厭ぢ。り気の茶もあるるくハ調合るされてりませと。
たとるよ物うれば。小浪もるよ手をつんく。世ハ前の宣ハどくそのより
まく後れるるしハ。豫て覚悟のうくるれどうが為よ殿ハといハ力弥
えうり外みるん。國へかうてそそそよ。ぞりひ釈があらみとも。外の

男をうつとハいやぢくとそひつめ。二生後あでくそのれ。楽んで居ます
よ。而も美いよ色慾國へ吹流しのひくハ。風の神もの手り胴慾世よ貞女
といハのハ。龍神や風の神の情ませるみとい訳を。笑て惑ひがまれると
るう。療治るされくりませ。点の病ぢやるけまとも夫をそのうちハ一
そそちぐひのるハのよ。れそまるも口のうち谷の戸あけて覚るの枯木
よ寝の風情の。夢想兵衛うち笑そ。つくくそりぢの病症も点の病
の閑ぢこのぢ。ハ釈又加古川氏のるのるハいくくナぶんもある症るうしぢ。
るれそまく人るまバ。それいまづそれみそりぢの病症をあいハべし。
貞女くと自誇たるくどるんが結髪の夫でもまぐ婚姻もそう待ぐぬ
よ女子のるうくびうつんく。淫婦とるるるハまど。既よ桃井殿の屋
敷みく。饗應司のるるよつれ力弥が使者よるせくまとれハ自分甚

ちくうんくをぬりたてゝいるゆゑ。力弥が長坐してそろけ合の支度でも出るゝふ。膳もとえうねまぶれ乃体。見いそりのそこなひでもあるく。一体狡しそうの脇がそでゝいろ〳〵縦内縁あるべきゝ。大切なる主用よ女子をそろ次よ出。口上の間ちゞひあつてんといふ。こゝろの気もつくぞ。礼節といふる沢。家だるもたゝれそうば。あるみ。祝もござるまい。その了簡ちゞいろ〳〵。たゞやふむよ娘が婚姻を整てやりたとく。山科ケけてのの推ゝ嫁入り。塩谷服を抱ゝあ〳〵ゝ。恨があれば。大星氏の不承知ゝ理の當然ゝそろを猜しゝ本義どのゝ。主君よ牙の暇を請うけ。女房子ゝどもふもたゝさぶゝ。虚子僧よ出て。跡よりのぐり力弥よ殺されて。外戸を抱ゝる帳面を消ゝ。その夜の婚姻をそろ待ばさふとゝ。悉皆狂人の仕沈ゝり。総令ゝあ舞戯ゝるどいふるの。人情をそろ出して。皆人

仰る不苦人も。苦人の部へ入ゝ。貞女よ仰る大侮婦も。貞女の部へ入ゝ。そろづ人の気をゝるゝ沢。第一よそれば足るものも又戯の字よりあゝ。ゝゝ沢咎めゝど。それより甚沢ゝも往ゝあゝ一ど勸懲を宗とゝ。唐山の小説ゝるどゝ。絶てゝ。さゝべ桃井殿の家老職ゝてゝ。ふつゝりゝるそろゝるゝるゝ。さゝて本その夜絶の汁ゝあもせよ本義どのゝ大星氏の内室。お石どの沢膝の下よ組布ゝを足ゝ。その子ゝてゝ。一すも免されゝど。力弥が直さま槍をそろて。加古川氏を刺ゝ。ゝもあゝべき苦ゝれど。由良之助がそろ〳〵顔で。立出ゝ。めづしや本義どの。計略の念願届き。腎力弥が手よ入つてゝ。そゝ本義どのゝ。ゝゝる已惚口上その又を報ゝ。その女児をゝゝる子の婦よそろる沢。義といふべきや。その婿よ殺されゝて。ゝゝが女児を妻ゝるゝを。信といふべ沢や。ゝゝゝて小波女郎へ。自

ちよこう
ゆんそうこう

ちよこう
ゆんそうこう

害せねばならぬ時亘じや。なのぜといふ。父を殺すものは結髮の夫なり。
おくれば力弥を父の仇とおもへば。貞女なるべし。示れを讐とせん。怨を
報ずれば孝なるべし。又も否とせばなるべし。夫も否とせばなるべし。父の枉死も
ものかはなるべし。只速に死するの外なし。おもふに。婚姻の稱いはんとおもへ。
自害せんとせしも。その是ぶかなるのみと。ようやく釈の繋るゝとんても
自害せざる。忌服の遠慮を繰りどよ。その夜ひそかに彩枕を並べん。
偽を楽むよりあらざるべし。そもそも何ぞや。かくまでの義理をうちぐるふ。
悞あるよりて。き慾國へ吸流しまひしは。更に慾の罪を懺悔せよ
とて。神仏のお骨折りなる慈悲なるよ。神のごとく凡夫なるべしとあるべ。
貞女なるべし。世を形なるものあらざる。風の神も龍神なるも。憎まるものも
なるべんとなく。天を恨まず。人を怨まず。さてはまた愚癡の至り。甚しき

遂ひなるべし。鄙なる田舎前が。縹致是ならんといふ。江戸紙寶ひしぎ。是は毎度ヤース
なるべし。賢女は義なるべし。美人は賢なるべし。色を好む色なるべし。一生のうちを
美人なるべし。顔色の美しんを擇ぶものは。女房も熟の妓も。なるべし。
美人。俗気の食なるべし。論なるべし。されば論なるべし。累のなるべし。女がなんといふ
でいのけと。志めるものは。賢を擇で。顔色を擇ぶべし。家がらを擇んで。
強あるべし。擇ぶべし。婿を擇むもなるべし。本義なるべし。婚姻をえらばれしは。
男なることは。以ての外なるべし。至極なるべし。似れども名聞を好むべし。始終の
なるべしとなるべし。その者は婿を教されても。一旦なる結んぶ縁の糸をねいま
なるべしとなるべし。人参飲で首縊るべし。女児は貞女を生させん
とのなるべし。推なるべし。嫁入もさせんべし。結納を返されたといふものも
えねばいつまでもなるべし。家を養ひまれて。大星親子が。仇人師直を撃

そうて。腹をさすり後ハ。小波女郎を尼寺へ登せ。一生不犯の比丘尼となさ
ば。ご親族なるべし。婚姻を。そう結ばせふハかりと釈の慈悲なるぞや
そうろう。筒が。臍の下へもちつかせまいろと。問るのぐら。扇をひらんて胸
うちあんげば。おるハさうろう。戸南瀬小波も。忽死迷ひの雲霧て恥
ちハ世悲しいやう。その日来るれくが。始終のつ紙もつ人が。世も
稀なる貞女ちぐや。義理が結ぐ面ハ。ぐ。といいるよ已惚しく。
げよもさうろうとるれうゆうて。神仏を恨ぐハ。義理よりうれて筒
ちぐひ。療治を受まうう。義の覚ゆうまあおえく。面目ハ秀も
ござうませぬと感涙袖を絞るあぞ。義烈兵衛ハ茫然とて。さも
あうん。さもあうん。ぐ非ようぐうれうべ。本復せんと疑ひるのとハ
かう。港口のうさうう。戸南瀬が送有。息もさうく来て。戸南瀬

母子とおうれを呼びて。秘頸とが申うくと。此日破船を修覆て。順風
をまうと吹しが。おううハ風ハまうとうろう。今纜をうくとうを。船がうるのふ
何しそござる。一十日もうを一日本へ。ぐうろうぬうとうろうれて義烈兵衛
が療治の効験。ぐとまでよ利。ものうと。三人の女子ハ嬉しさあまうう
て。礼をいハ申ハ。暇をうえ。そうくよ。後者隠つ一散よ。番の
ものうあくされバその日辟集の男女ハ。おうる小波が病症を逐一
笑く歎息し。この国でハ氏神のようよハ。お深久松。三ぬ七ぬ。
夕霧伊左衛つが不訳。梅川忠兵衛が道行るどうう。義理
とハ申ハ。ぐ。情なるぐやと感よ堪しよ。それよりぐうと。
ようくものもるぐん貞女烈女とぞうる。おる女郎や。小波ハ寮の対の
うも。爵碎てうく。笑べ。義理ぐ稱ぬうう。況て仏とも法とも

ちゝぬ吾們。色慾をのゝしりてこゝ。恥をちゝねバ人みゝて人の数みも
入りがたし。那くいもるくと。療治・を受て恵の病の根を断ちもあるならバ。
廿五の曉を一形とする定業也。世間るゝよ五六十まぐ。生延るゝ也
あるべし。有がゝ平常とゝ。五欲悪兵衛を伏洋。隨喜渇仰の声
耳よ備。ちがゝ鳴も止ざれば。五欲悪兵衛ハ眞高くとひゝつ。ちゝ
ず。ゝれ必年國ゝくハ。紙数の上よ。ゝ。ゝ。ゝ

べとて兄弟ごう夫婦とするものもるく。色の為に餓て死するものも
るす。男色ハ倫外の交りなれど。色情あれば是常
あり。地獄あれバ極楽もあり。柳ハ緑花ハ紅のいろ〳〵。春来りて開ざる花も
るの。時来りて。情の動ざる男女ハあらじ。鳥の春媾合ハ。陽気に感じて。その
前を草木と共にもとり紙ものく。鶴の羽ハ木の紫に象る。茲の三羽
媾合ハ時のたゞめに感ぜるこ。こり紙ものく。描の時ハ。十二時を離ざべし。春
女ハ陽気を感じて男を求ひ。秋士ハ陰気を感じて女を求ふ。鹿の秋
媾合ハ陰気を感ぜるこ。水鳥の夏媾合ハ陽気を感ぜるなり。扉
交ハ月に暈あり。陽の陰を犯ものこ。兎その牡を慕ものハ必ず孕む。
その気を感ぜるこ。夫陽ハひとりあるとも。陰ハひとりあるこ。陰陽合散
まるく。四時移ざるとなり。春ハいさましく。夏ハ猛く。秋ハ悲しく。冬ハ

哀に。天に四時あるこ。人に喜怒哀楽あり。されば人の心を和らへ。こゝろ
ゝ乱ハるゝ。釋氏ハ人ものとも色慾を禁ず。その人情に反るゆえ。和尚
もるゆ色中の餓鬼のごと。流る水ハ堰るとも。色慾ハ禁めがたし。扨妻子
ハ衣服のごと。衣食足て礼節をまるとあるとも。礼壌酷しければ。人
和せず。礼ハ親しきつゝを所以なり。水桶一つで貰ふこと女房ものこと
一生そひ遂げるあハあるべ。十荷共荷の嫁入道具と。四五日まくらを
運べとも。一年とそひ遂げぬ夫婦もあり。且有用ハ牛馬の中にあるもの
の尾ハ飛ばに用なり。まろれども。鳥の尾を剪とれハ。遠く飛ばず。人
の手ハ物に用なり。まろまども。人の手を縛とれハ。速く行事なし。それ
をりてそれを見ればの目前の理ハ形外の理にまるべ。有用の用ハ無用の
用にまるべ。古ハ来るれども。脱べ。歯ハ堅けれども。脱易しの。歯の脱

易を惰で。古のごとくさんとせども。よく見や。舌は歯の用をなさず。歯は舌の用をなさず。各
はなる所あり。て歌舞戯は奇異戯の世界あり。是慾國は。是慾國乃
世界あり。おぬが有用の辯をなす。こゝ乃用を捨おぬが目前乃
理を推て。こゝ理外の理紙折んとするは。舌をもて物を噛む歯とする
水をもてらんとするが如し。こゝ乃つくおぬが為体をなるは。齢四十よ
及で妻もなく。年は豊なれども。肚饑さゝる面つゝ。世は曖
なれども。寒さをふゝぐ。丈田の國土を知れて。こゝ乃日きう
まで。こゝ乃あるは。養歯で海ゝ。この隅をなげるゆうなり。ちひさん。
陝は。偏徹枯な理屈いくれば。こゝ。雑ぶれをう〳〵喰べれ。この國まで。
こゝ乃はこゝ。こゝ乃はこゝ。こゝ乃はこゝ。こゝ乃はこゝ。慾國
形とする有は。遂は恨を改るは。玉〳〵。顔回も長生せば。聖人となるべ。

孔明も上壽を保ば。玉となるべし。蜂蜻も朝は生まれ夕は死ぬ。蝴
蝶はまもなくあらん。槿花も七日衰ぬ。桜はまもなくなるべ。是慾國
の男女も五六十年で世はあらば。おぬが教をまもるべ。こゝ乃賢人貞女
となるべし。人の悪は若ひ。こゝ乃言は行ひ。こゝ乃行は信ぜられ。
ちて。こゝを練もるとは。孰も識とあり。ざるん。り頤。こゝ乃舌を弄ず。
細首うちとこゝをんと罵る声雷のごく。双を閉しく跳り蒐て。
凡を碾と砂をべの勢ひは辟易し。群集の男女は撓つ。こゝ乃
東西へ散乱し。次の日より後と一人も。夢想兵衛が療治を請はる
ものるけをば。こゝ乃はまで。懇は欵待る。旅宿のあるじも。こゝ乃
こゝ一十日もあるべ。こゝとあるべ。おるふ戸南傾ホは侵れ。日本へ
べりしは後悔をこゝとざれば。旅宿を立ち。港口の方

へ赴くよ繁ぎ捨てる漁船あり。こよ至て憂起兵闘い。忽地曉て横牛を拘。是一慾ゆえ身を寞とする國あり。約束するものなど。憂みあえず。どもこるよ今ようやくども一艘の漁船あって主なる死。彼佛鳴傑人ぞ。強飲貪婪の二國へ船をのせ送り出べしと宣ひ。はるのどしさりやくと。ひとり点灯りと繋て纜を解とひとてく。不出孤や四方真闇よりて。浦風颯と吹来り。船を忽地澳へ吐して走ると箭よりも疾く。千里も千里。万里も万里。めつたむせうよ吹儒さるくと。一昼夜にて。彼風たちまち軟ぎて。酒の匂ひ芬くと。鼻の邊を通り筋。強飲國の大湊底波の浦よ着ける。

總評

道よ達するものハ道よりて教。情よ通ずるものハ情をもつて説く。

公道人情両ぶら難し。倘公道とりて論ずれば人情を如何。人情の隨よ説けば公道を缺く。只理をとれを推とれハ柱よ膠して琴を調ずべし。夫みづからを彼をもつて彼を得るものハ。それ人の彼を彼をみづからを得ず。人の適くよ適て。みづからの適よ適ざるものなり。孔子ハ仁義を重とし。盗跖ハ利欲を重とす。各彼を彼をもつて彼を責む。相罵るとれハ。声の大なるものハ。それよ勝。相鬪とれハ猛なるものハ。彼が勝べしとざる所をもつて。彼よ勝べしとざる所以。ぶら勝べし所をもつて。それよ勝ざるものハ。仁を重とする所以。俗落の眼力ハ。真の強弱をえず。只眼力を走るものハ必疾く。勝るものハ必のづから強ぶ。設夫人妻は天よ勝。天定て人よ勝天の弱なるあり。人の強なるあり。寡ハ固よりて衆よ敵

がてー。小人国よりも。大よ款ーがたし。苟も情慾妻子とそれハ。仁義もこれ
よ勝ぢ。一條の箭ハ折がてー。恩愛と色慾
とハ。人情の聚ふ所。人改繁けまべ。山も四ち。人情の聚ふ所必濁る。
水清けまべ魚住ぢ。人清ければ慾寡し。清き紙捨て濁よ拓び。
安処を取りで危きよ楽む。ち紙ぬて濁るものハいよ〳〵濁り。危処ものハ
いよ〳〵危し。既ちその危き紙ある。幼ちといくども安ちべ。版の中
ものるの砂あり。泥の中ものる刺るるものあるどこれを懼て。居ものを
擇ち。擇ち人よ拓よ。ちべ。只その獨と慎むよ。ちべ。

夢想兵衛胡蝶物語巻之三終